

シンポジウム

附属鎌倉小学校の新しい役割

横浜国立大学教育人間科学部附属鎌倉小学校
赤坂 桂

1 はじめに

附属鎌倉小学校では昨年から新しい学校づくりに取り組んでいる。研究の方法や教育課程・学校行事の在り方などを見直し、附属学校としての新しい役割を果たそうと動き始めたところだ。

その視点は

- ・地域に根ざした学校
 - ・大学・附属・地域・公立との連携拠点
- の2点である。

附属鎌倉小学校が「鎌倉」に存在し続ける意義、地域の学校として機能していくために何ができるのか、そして「附属」として大学と公立を結ぶ拠点になり、どんな役割を果たせるのかを模索していくことが、これからの附属学校には必要な視点であると考え、具体的な取り組みをスタートしたところである。

2 地域に根ざした附属学校

広い学区から子どもたちが通うため、地域に開かれている、というよりむしろ閉ざされた学校という印象をもたれていたようだ。子どもたちは毎日、朝夕に町を歩いているわけだが、「自分の住む町」ではなく通学路として通り過ぎるだけだった。町の人たちにとっても往来は目にするものの「我が町の子」という感覚はほとんどなかったようだ。校外に出て授業や活動をする機会は少なくはなかったものの、どちらかというと施設見学や遠距離での宿泊などが多く、「地元」に根ざした学習はほとんど行われてこなかった。したがって子どもと町の人、教員と町の人のかかわりも薄く、「鎌倉」という豊かな地域の中心部にありながらもその良さを生かし切れていなかったという現状があった。

現在の学校には今日的な課題を解決していくため学校・家庭・地域の連携の必要性が唱えられ、学校支援ボランティアの受入など家庭・地域の教育力を活用した取り組みを具体的に進めていくことが求められている。附属学校が単に研究のための場としてだけでなく、「モデル校」の役目を果たすためにも「地域」の教育力を生かす学校の在り方を提案していかなければならない。

まずは鎌倉小学校の子どもたち、そして教員が進んで「鎌倉」の町にかかわり、人と出会っていく、そんな「生」の学びの場をめざし、具体的に取り組んでいくこととした。

今年度、実践してきた地域とのかかわりの例を紹介していく。

①海洋教育

海を教材に様々な教科領域での新しい試み。春の全校海浜遠足を皮切りにそれぞれのクラスで多様な授業が展開された。

- ・宿泊学習の食材を地元の魚屋から購入（2年）
- ・海の生き物を観察し、クラスで飼育（2年）
- ・アジを開きにして朝食づくり（4年）
- ・OPヨットセーリング教室（4年）
- ・ライフセーバーによる海の安全教室（4年）
- ・夏休みの遠泳（5年）
- ・ウインドサーフィン教室（3～6年）



材木座や由比ヶ浜、江ノ島などの漁業関係者やマリンスポーツのインストラクターと教員が連携し、どのような活動が可能なのか、どう教育的に価値づけるかなど探ってきた。現場・自然の中でしか学ぶことのできない貴重な機会を得ることができた。

②地域施設との連携

文化施設、商業施設が数多くある鎌倉だからこそ様々な授業が構想できる。「本物」に触れる機会を大切にしてきた。

- ・建長寺での宿泊（3年）
- ・小町通りでの社会科学習（中学年）
- ・蒲鉾店との連携（2年）
- ・明月荘での茶道体験（4年）
- ・近代美術館での鑑賞（2～6年）



「地域学習＝社会科、総合的な学習」という短絡的な発想ではなく、「町」を題材にして様々な教科で授業をデザインしている。地域の教育力を生かした授業の展開例が増えてきた。

③アートイベント「なんとかナーレ」

学校をアートの拠点として位置づけ、児童、保護者、市民、アーティスト、学生、美術関係者、NPO法人などが作品展示やパフォーマンス、ワークショップを通してコミュニケーションを図るイベントを開催している。

全くの通りすがりの人、何十年も前の卒業生、近所の人などこれまでの小学校関係者の枠を大きく越えて様々な人々が集うことができた。

予定された出会いではなく、偶然の出会いの中にこ

そコミュニケーションが生まれる。子どもたちも見ず知らずの人だからこそ、ドキドキしながら話しかける、といった生きた場となっていた。多くの人が気軽に集う「原っぱ」のような学校という理想の形を具体化しつつある。

3 大学・附属・地域・公立との連携拠点

附属校としての使命として「実践的」で「先駆的」な研究拠点であることも求められている。大学へ、県内外の教育機関へ情報を発信する場として機能しているのか、という点を問いただした。自分の学校の中でしか通用しない独りよがりの授業を発表したところで参観者の関心を得ることはできないだろう。そこで「附属だから」できる新しい研究の在り方をつくり出そうとしている。研究者と実践者と学生とが協同し、お互いに学び合う拠点としての場を提供していくことにした。

大学の先生から専門的な立場として新しい考え方、方法、技術を学び、教員は実践者として子どもの成長と現況に応じて指導していく。授業に取り組む具体的な子どもの姿を見て、大学の先生も学生も他校の教員にも得るものがある。それぞれの立場にとってプラスとなる「教育の在り方」を考える研究の場にしていきたい、という思いで教育UPセミナーを行っている。



教育UPセミナーは年に3回行っている。教科ごとに運営し、テーマも研究会の方法もそれぞれである。

授業公開・シンポジウム・実技研修・実践事例報告など様々な形態でのセミナーとなっている。

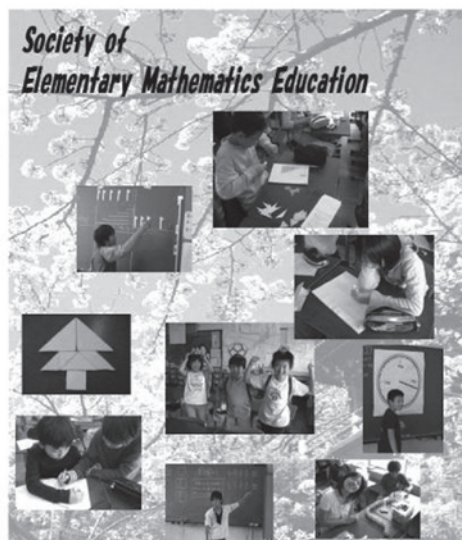


授業を公開して質疑応答を行う、といった形式にとられず、授業者、大学の先生、講師、学生、中学・公立の先生が意見を交換し、議論するといった対等な立場での研究会も行われている。



実技研修では大学の先生に専門的な技術指導を子どもたちにさせていただき、一緒に参観の先生たちも体を動かした。動きのコツを自分で確かめながら、そして子どもたちの実際の動きを観察しながら最新の指導法を学ぶことができた。

年3回のセミナーだけでなく、土曜日に定期的に自主研究会を開催している教科もある。公立の先生、大学生など毎回十数人の参加者が自分たちの実践を持ち寄り、語り合う場ができあがっている。



HACHIMANKAI

お休みのところおつかれさまです。
事務室前入口から入って、
2階会議室へお進みください。
附属鎌倉小学校 算数部

-1-

4 おわりに

附属鎌倉小学校として大切にしているのは「研究の日常化」である。研究発表会をイベントにせず、年間を通して日常的に研究を積み重ね、発信し続けていく学校でありたい。自分たち教員が試してみたい、もっと知りたいことをテーマにして授業を行い、様々な立場からの意見を交換し、高め合える環境を創りたい。専門家の理論を背景に自分たちで新しい授業を創り出し、子どもたちの成長を実感することができる学校はエネルギーに溢れている。町の人たちから愛され、見守られる子どもたちは安心して育っていく。

新しい附属学校のあり方を求め、鎌倉小学校は姿を変えつつある。教員も子どもも、町の人たちも研究者も全ての人にとって価値のある活気溢れる学校のモデルとして先進的な役目を果たすべく研究活動を進めている。